

聞きて、南無仏と称して天頭を得たり。之を糾明する処、盗人上の如く之を申す。一国皆天を捨てて仏に帰せり云云。彼を以て之を推するに、設い科有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか。而るに今示し給える託宣の状は兼て之を知る。之を案ずるに難を却て福来るの先兆なるのみ。妙法蓮花経の妙の一字を竜樹菩薩の大論に釈して云く、「能く毒を変じて薬と為す」と云云。天台大師云く、「今経に記を得るは即ち是れ毒を変じて薬と為すなり」と云云。災 来るも変じて幸と為らん。何に況や十羅刹之を兼るをや。「薪の火を熾にし、風の求羅を益す」とは是なり。言は紙上に尽し難し、心を以て之を量れ。恐々謹言。

十二月十三日

日蓮 花押

御返事

西山殿御返事

建治三年（一二七七）一月二十三日。五十六歳。於身延。西山氏宛。  
一紙 身延山久遠寺曾存。（定一二九一頁）

としごろ後生をほしめして、御心ざしをはすれば名計申候。同行どもにあらあきこしめすべし。やすき事なれば智慧の入事にあらず。智慧の入事にあらず。恐々。

一月廿三日

日蓮 御判

西山殿御返事